

【解説】

畏敬と対抗のクマと人間

新船海三郎

「クマ」をめぐるアンソロジーを編む契機は、もちろん、昨今の史上最悪のペースで進むクマ「被害」がある。二〇〇人近くの人身被害、うち死亡は一三人というのもこれまでにない（二〇二五年一月六日現在）。農山村からの人の撤退によるクマの生息域の拡大、捕獲上限のとりきめなどクマ対策による個体数の増加（安定）、ドングリの不作など食糧不足、気候変動による異状高温、風水害の頻発による山林破壊、等が指摘されている。一方で、なぜ人身被害が増えたのか、本来雑食のツキノワグマが人や家畜を襲うのはなぜか、かつてはなかった市街地への侵入の目的は何か……、いったいクマは正確にはどれくらいいるのか、など、分からないことも増えている。

ドングリが平年並みのところでも、観光地、市街地へ出没するという話もある。なぜなのか。大雑把な「感覚」でなく、地域と個体ごとの分析が求められているように思う。政府・自治体

が示す「駆除」一辺倒に見える対策が果たして妥当なのか（山と里の境界にはこ畏を仕掛け、捕らえては山に返すこととうまく対応しているところもある）、政府は中期的に個体削減をすすめるというが、森林生態系あるいは食物連鎖にどのような影響を及ぼすのか、疑問は残る。

また、「駆除」を警察官や自衛隊員（OBを含め）にも担わせようとしているが、銃を扱うとはいえクマには「素人」のこと、ベテランハンターの指摘を待つまでもなく、いかにも間に合わせで、逆に危険が増さないか、不安である。本書に収載した「熊の村」や「幸太郎」には自衛隊の武器のことや、恐怖のあまり発砲を急いだり、クマを知らない「素人」警官の苦い話も綴られている。過去の歴史や事例に学んでことにあたるのが至当のように思うのだが……。

ともあれ本書には、北海道の熊、北氷洋の白熊、本州のツキノワグマと、クマを知る手がかりを得る話がそれぞれに展開されている。発売中の本のタイトルになっている作品は他の出版物への収載は見合わせるという出版界の約束事もあるが、見送らざるを得なかった作品もあったが、逆に「サカモイナクと熊物語」という、一九四七年発行、七三年復刻されたが現在ほとんど目にするのできない、樺太アイヌと熊との相互畏怖、対立、交歓の物語を入れることができた。装画の樋口達也さんがクマについて関心を持ち、寒川光太郎の小説・随筆集『熊』を持っていると紹介され、一読し収めることにした。

山の領主と里の支配者の、棲み分かち合い、お互いへの敬愛、人の子を育てるのと変わらぬ仔グマへの愛情の注ぎ方、敬虔なイヨマンテ（熊送り）、自然の「掟」……細部にも行き届いた

目は、作者の熊とアイヌへの親愛を語っていて、まったく貴重な作品と言える。機縁とはいえこのように復活して読者の目にとまるのは、作品にとつてもうれしいことと思う。

特筆したいのは、ここに収載された作品のほとんどが、クマの視点、ときにその「意識」にまで立ち入って、クマとは人間にとつてどういう存在であるのかを描き出していることである。

一九一五（大正四）年の北海道苫前村三毛別で起きた熊による開拓民襲撃事件を題材にした戸川幸夫「熊風」においてさえも、巨大熊「袈裟懸け」をこう描く。

「袈裟掛けは本当は人間が怖かった。彼の領土内のあらゆる生き物たちは彼を恐れ、彼の怒りに触れないようにびくびくしていたが、人間だけは常に彼の前で胸を張ってきた。

強さを誇る者は、強い相手を畏敬する。袈裟掛けとて同様だった。憎悪と復讐に燃えていても畏敬することでは変りはなかった。袈裟掛けの右のうしろ肢と、肩に喰い込んでいる二つの鉛玉の恐怖が、畏敬と憎悪の心をかき立てた。

だから彼が最初に人間の叫びを耳にしたとき、彼は最初低い唸り声をあげたに過ぎない。今までどんな相手——人間以外の——に対してもふくらませたことのない頬と首すじから背にかけての毛を逆立たせ、彼の巨体を倍にもふくらませて大きく怖ろしげに見せかけたのも内心、人間に対する畏敬があったからだ」。

同じ題材を「熊嵐」に描いた吉村昭は「朝次郎」で、「人間も、飢えた熊にとっては一種の食物でしかない。熊が人間をおそい、その内臓を肉を食いちらす事件は、例年のように頻発している。そして、いったんその味を知った熊は、人間を専門にねらうようになる」と述べるが、作

品最終部では、撃ち倒した熊についてこのように述懐する。

「かれは、熊の体を見下した。大きな雄熊だったが、体はひどく痩せていた。骨格が浮き出て、体毛はひからびている。激しい飢えになやまされていた熊であることはあきらかだった。ふと、かれの胸に、熊に対する物悲しさに似た感情が湧いた。食料不足にあえいだ熊は、危険をおかして不本意にも村の近くにおりてきたのだらう」

人間がもはや畏敬に値する存在でなくなつたとはいわない。北の原野に鋸と斧、鋤や鍬で立ち向かい、いつ果てるともしれない大地との格闘を、たゆまず、一步一日、倦むことなくつづける人間という存在を初めて目にした熊たちは、あるいは畏敬を覚えたかもしれない。しかしそれから一〇〇年あまり経って、開いた土地を手放し、山と里との境界は手入れもされずに原野に戻るか荒れたままに放置されてみれば、熊たちにとっては、なんで奥へ奥へと追いやられたか、と問いたくもなろう。

北の地にずっと生きてきたアイヌにとって、熊を神の化身として大切に扱ってきたことは前述した。「獣の仔のうちで、熊の仔ほど人間に近いものはない。そのまるまると肥った適当な大きさと、やわらかそうなむく毛と、かなり高度な智慧とは、元気な人間の子そっくりに思わせる」と母熊を仕留めた代償か、仔熊を慈しむ酋長の妻には、どこか敬虔な光もある。

作者の寒川光太郎は、収載した「密猟者」で北海道初の芥川賞受賞作家となったが、骨太に人間とクマとの格闘、そこから立ちのぼってくる「いのち」を描き出す。

「熊はそこで再び咆哮した。獣の地鳴りのする様なその声は、森々と暗みゆく四辺にこだまし、次

第に小さく遠退いて行った。

熊はその余韻の中に自分の力を探って満足し、全身を打撃に打込まうとした瞬間、それを躊躇させる何ものかを人間から受けたのだ。熊はぬーっと微塵も隙なく進んで来る人間を見た時、かつて経験した事のない気が——彷彿たる雰囲気敵の周りに漂っているのを知った。そして獣同士だけが本能的に意識する圧迫を鋭く感じた」

まさに一触即発の獵師豹と熊との張りつめた空気。読む者をわしづかみにし、生死の瞬間に立ち合わせる。緊張はいのち、生きること、それをどう受けとめるかに刺さってくる。

クマとどう付き合うか。「熊の村」が提起する一つはそれである。開拓地の歴史などもたどりながら、たび重なる熊の襲撃に、開拓第三世代の佐太治は提案する。

「どうだろうね、今年中に部落つづきの密林を伐り開いたら……俺の祖父が殺された沢ぐらいまで伐木して、熊笹も刈りとってしまうんだ。それから部落内の落葉松や落葉樹の下枝をおろし、下生えの雑草も刈る。沢に残っている雑木林はみんな伐ってしまう。」

こうすれば熊もひそむところがなく、部落に侵入しにくくなる。それから部落のはずれでなくて、中央部のどこからも見通しのきくところに有刺鉄線を張りめぐらせた頑丈な共同経営の牧場をつくって、部落中の牛、馬、緬羊を入れる。そしてそこには交替で見張りをするんだ。……」

一九六〇年代半ばの話である。被害を最小にする工夫は農民の側にはあったのである。彼ら

には、「それと駆けつけ一斉射撃で、根もとでわが子を護ろうとがんばっていた母熊もろともしとめた。仔熊の方は十分に食べてまるまると肥えていたが、母熊はひどく痩せていた。『熊だつて子を思う心は同じなんだなあ』

解剖を見ていた部落の一人がしみじみと言った。自分は食べなくとも子供だけにはひもじい思いをさせたくないと身を削るようにして働いてきた人々には、これが野獣のこととは思えなかったのだ」。

「幸太郎」の主人公もまた、部屋に垂れた母親の熊の皮にしがみつき、干からびた乳房に口を押し当てている仔熊にもの悲しい光景を見る。「なめとこ山の熊」の小十郎は、「淡い六日の月光の中を向うの谷をしげしげ見つめている」母子の熊の会話を聞いて胸がいっぱいになる。そして、「音をたてないようにこっそりこっそり戻りはじめた。風があちちへ行くな行くなと思いつながらそろそろと小十郎は後退り」^{あとずさり}せずにはおられないのである。熊は自然とも言え、自然とともに生きる人間のわきまえを小十郎は示している。

「自然の掟」で今日の問題が解決するなどとは思わないけれども、クマは駆逐すべき対象ではなく、やはり人間とともに生きていく存在であるだろう。少なくとも文学はそのように捉えている。収載した諸篇から学び、考えることはないか。いまは、人間の知恵の出どころのように思われる。森や山にクマよりずっと後から手をつけたのは人間なのだから。

(しんふねかいさぶろう・文芸評論家)